

# 権利学習を日常の児童生徒指導に生かす研究

年間を通じた権利学習による子どもの変容

児童生徒指導研究会議

花形 晋<sup>1</sup>

藤田 善一<sup>2</sup>

中村 邦彦<sup>3</sup>

増淵 賢一<sup>4</sup>

## 要 約

本研究会議は、権利学習を日常の児童生徒指導に生かすために、まず、教師が日常行うすべての指導や手立てを、人権尊重意識をもって行うことを前提とした。事前調査を行い、児童生徒の実態を把握し、学級の実態に合った参加型の権利学習の単元を設定し実施した。その後、事前と同じ調査を行い、学級の子どもたちにどのような変容が見られたか、比較して分析した。

そこから見えてきたことは、普段の教科指導で補いきれないものを権利学習で補えるという、参加型権利学習の有効性である。確かにすぐに目に見える変化が表れるものではないが、継続していくことで子どもの自尊感情は次第に高まってくる。また、学び合い、深め合うことで、相手を受け止め、認めていく他者尊重の態度が身に付き始め、互いを大切にしようとする学級集団へ育ってきている。

さらに、実践した教師自らが参加型権利学習のよさに気づき、周りの教師にもそのよさが伝わることにより、学年や学校全体での取組に発展していくことが望まれる。

キーワード：児童生徒指導、人権尊重意識、参加型権利学習、自尊感情、他者尊重

## 目 次

主題設定の理由	128	5 検証授業の実際と考察	131
1 研究の動機	128	(1) A 小学校 1 学年の実際	131
(1) 小・中学校における権利学習の実態		(2) B 小学校 4 学年の実際	134
.....	128	(3) C 中学校 2 学年の実際	136
(2) 川崎市と全国の調査から見られる		6 事前調査・事後調査の結果と分析	137
不登校といじめの現状と課題	128	研究のまとめ	139
(3) 本年度の研究主題について	129	1 研究から見えてきたこと	139
研究の内容	129	2 今後の課題	141
1 研究のねらい	129	参考文献	142
2 研究の仮説	130	指導助言者	142
3 研究の構想図	130		
参加型権利学習の進め方	130		
4 研究の方法	131		

<sup>1</sup>川崎市立金程中学校教諭(長期研修員)

<sup>2</sup>川崎市立久本小学校教諭(研修員)

<sup>3</sup>川崎市立菅生小学校教諭(研修員)

<sup>4</sup>川崎市立宮崎中学校教諭(研修員)

## 主題設定の理由

### 1 研究の動機

#### (1) 小・中学校における権利学習の実態

川崎市では、「子どもの権利を尊重する社会づくり」をめざした、全国で初めての総合条例である『川崎市子どもの権利に関する条例』（以下、「子どもの権利条例」）が、2001年4月に施行された。子ども委員がかかわりつくられたこの条例には、権利学習の必要性（第7条）がうたわれている。

2003年に川崎市子どもの権利委員会がまとめた『子どもの参加に関する検証結果について（答申）』では、市内の公立小・中学校での権利学習の取組状況が報告されている。まず、権利学習の教育課程への位置付けに関しては、総合的な学習の時間に位置付けて、人権尊重教育に積極的に取り組んだ小学校の例もあるが、大半の学校では、特別活動、または道徳の中で行っていることがわかった。また、権利学習の実施率は、小学校が100%、中学校が約94%で、何らかの形で年に1回は実施されており、子どもたちにとって「子どもの権利条例」に触れる大切な機会になっていると思われる。しかし、それが、ただ資料を配って読んで終わりという権利学習ならば、内容が十分であるとは言い難い。

教職員を対象とした子どもの権利に関する校内研修の実施に関しては、小学校が約74%、中学校が約64%となっている。100%の実施に至っていないのは、年々、校務が多忙になってきており、なかなか研修の時間を確保できず、隔年などで実施している学校もあるのでは、と推察される。教職員の意識の高揚のためにも、より多くの学校で子どもの権利に関する校内研修が実施されることが望ましいと思われる。

また、2004年4月に出された『かわさき教育プラン中間報告』では、子どもの権利保障に向けた教育・学習について、「子どもの権利条例に基づいた事業により、学校現場において徐々にその理念の浸透が図られてきています。」と一定の評価がなされている。一層広く浸透させていくためには、教師自らが人権尊重意識を高くもって、いつも子どもたちと接していくことができるよう、さらなる事業の継続が求められている。

#### (2) 川崎市と全国の調査から見られる不登校といじめの現状と課題

川崎市教育委員会の調べによると、2003(平成15)年度の不登校の人数(不登校を理由として年間30日以上欠席した児童生徒数)については、小学校221人、中学校1,076人で、前年度よりそれぞれ減少し、増加傾向に歯止めの兆しが見られた。これは、適応指導教室等の指導の成果によるところが大きいと推察される。しかし、依然として学年進行に伴ってこの数は増加し、特に小学6年と中学1年を比べると、統計上3倍近い増加が見られる。また、いじめの発生件数については、中学校では前年度に比べ減少してはいるものの、小学校では34件から69件に倍増した。文部科学省の報道発表<sup>1)</sup>によると、2003年度の全国の公立学校におけるいじめの発生件数は、23,351件で、8年ぶりの増加となり、小、中学校共に増加に転じている。

だが、この結果から、増加の原因を心の荒れの低年齢化が進んできたからと見るのは早計であろう。むしろ、学級・学校等で相談や申告をしやすい環境が整ってきたことによる方が大きいと思われる。また、同様の傾向は、人権オンブズパーソンに対する相談にも表れている。2003年度の川崎市人権オンブズパーソンへの子どもに関する相談件数<sup>2)</sup>は206件で、前年度より45件増加しており、その

<sup>1)</sup> 文部科学省ホームページ『生徒指導上の諸問題の現状について（概要）』 2004年8月公開

<sup>2)</sup> 川崎市『川崎市人権オンブズパーソン平成15年度報告書』 2004年 p.7・p.11

主な相談内容の1位は、「いじめ」(71件)で、相談件数の約3分の1を占めている。いじめを受けて悩んでいる多くの子どもたちが、ここに相談に来ていることが数字からも見て取れる。

学級・学校でいじめの問題がある場合、教室が子どもにとって安心してありのままの自分を出せる居場所ではなくなることが多く、また、学校に居場所がない場合は、不登校のきっかけになりやすい。

このような状況から、学校において子どもの権利を尊重していくためには、安心して過ごせる居場所や、自分が必要とされたり大切にされたりする経験の場を、子どもと教師が共につくっていくことが重要だと考える。

### (3) 本年度の研究主題について

本研究会議では、「子どもの権利条例」施行以降、条例の趣旨を実現するために、権利学習資料を用いた授業実践や仮説の検証を行ってきた。過去2年間の研究主題と検証結果は以下の通りである。

表1 本研究会議における先行研究

H14年度	研究主題『子どもの権利学習を通し、セルフエスティームを高める研究』
	検証結果「参加型学習を取り入れた子どもの権利学習を行うことで、自分を好きになり、自分に自信をもち、自分を大切にす気持ちもて、セルフエスティームは高まる」 セルフエスティーム：自尊感情、自己肯定感、自分を大切に思う気持ち。
H15年度	研究主題『人権意識豊かな子どもの育成 子どもの実態に合った手立ての探求』
	検証結果「子どもの実態に合った権利学習を展開することで、子どもの権利を身近にとらえて人権意識は高まる」

そこで、本年度は、上記の先行研究を踏まえながら、次のような研究主題を設定した。

#### 《研究主題》

#### 「権利学習を日常の児童生徒指導に生かす研究

- 年間を通じた権利学習による子どもの変容 - 」

#### 研究の内容

##### 1 研究のねらい

日常の教育活動における様々な場面で、教師が人権尊重意識をもった対処的な指導や継続的な指導を行っていく中で、学級の実態に合わせて単元構成した権利学習を教育課程に位置付けて実施することが一番望ましいと考える。また、その単元の中に自らの学びの中から気付かせる参加型権利学習を設定することにより、そこへ子どもたちが参加することで楽しさや安心感、充実感を得ることができ、そのような体験の積み重ねが、周囲への働きかけなどの自発的・主体的な行動へつなげると考える。

これにより、子どもの人権尊重意識をより高め、「心の居場所(安心してありのままの自分を出せる人間関係のある空間)」として安心して生活できる学級や学校がつけられるということを実践によるデータを蓄積して明らかにしたい。

以下に、ここで登場した、語句の説明をする。

「対処的な指導」とは…発生した問題行動そのものに対応して、問題を解決していく指導。

「継続的な指導」とは…系統立てて見直しをもって行う権利学習を含めた、日々積み重ねて行う学級での指導。

「居場所」とは…「ありのままの自分であること、休息して自分を取り戻すこと、自由に遊び若しくは活動すること、又は安心して人間関係をつくり合うことができる場所」(「子どもの権利条例」第27条より引用)

「人権尊重意識」とは…自分の人権を大切にしながら、相手の人権も同様に大切にす意識。

「人権尊重意識をもった指導」とは…いかなる指導においても相手の気持ちに寄り添う。具体的には、相手の話をしっかりと聴き、気持ちを受け止め、共感することで、相手を尊重する。

## 2 研究の仮説

参加型権利学習を計画的、継続的に実施することで、自尊感情が高まり、他者尊重の態度が身に付き、お互いを大切にしよう、学級集団をつくることができる。

## 3 研究の構想図

研究のねらいを実現するため、基本的な考え方を次のように構想した。

日常の児童生徒指導を行う上で、今の子どもの姿を把握し、学級の実態に合った学習計画を立て、参加型学習を取り入れた権利学習を展開していくことにより、「自尊感情(自分を好きになり、自分に自信をもち、自分を大切にすることが大切)」を高めていく。

また、活動を通して、相手の話をしっかりと聴き、

気持ちを受け止め、共感することで相手を尊重することを学んでいく。そして、教師が日々人権尊重意識をもった指導を行っていくことで、子どもにも相手の気持ちに寄り添う姿勢が自然と身に付いてくる。これらが、お互いを大切にしよう学級集団をつくり、学級や学校を安心して生活できる「心の居場所」にしていくと考える。

### 参加型権利学習の進め方

まず、参加型学習とは、「参加者が主体として活動の中心となり、参加者相互が感じたこと、考えたことから学び合い、深め合う学習」であると ERIC 国際理解教育センターでは定義している。これは経験学習ともいい、体験する、体験したことを振り返る、一般化する、応用するという4段階を経て、意識化していくと説明している。具体的な活動としては、ランキング、ロールプレイング(役割演技)、コミュニケーション活動等、様々な手法が行われている。また、アイスブレイキング(雰囲気や和らげるために行うゲーム)を活動の中に取り入れることで、スムーズに学習への導入ができる。

よく権利を学習すると子どもがわがままになると言われるが、権利を意味する英語 right の原意は、「正しい、正当な」であることを考えると、エゴの強い主張やわがままな行動は、相手の存在を尊重しておらず、正しい権利の行使とは言い難い。このことについても、権利学習を進めていく上では、押さえていきたい。そこで、権利学習に参加型学習の手法を取り入れると、自分と相手の相互関係による学びが行えるのでは、と考える。

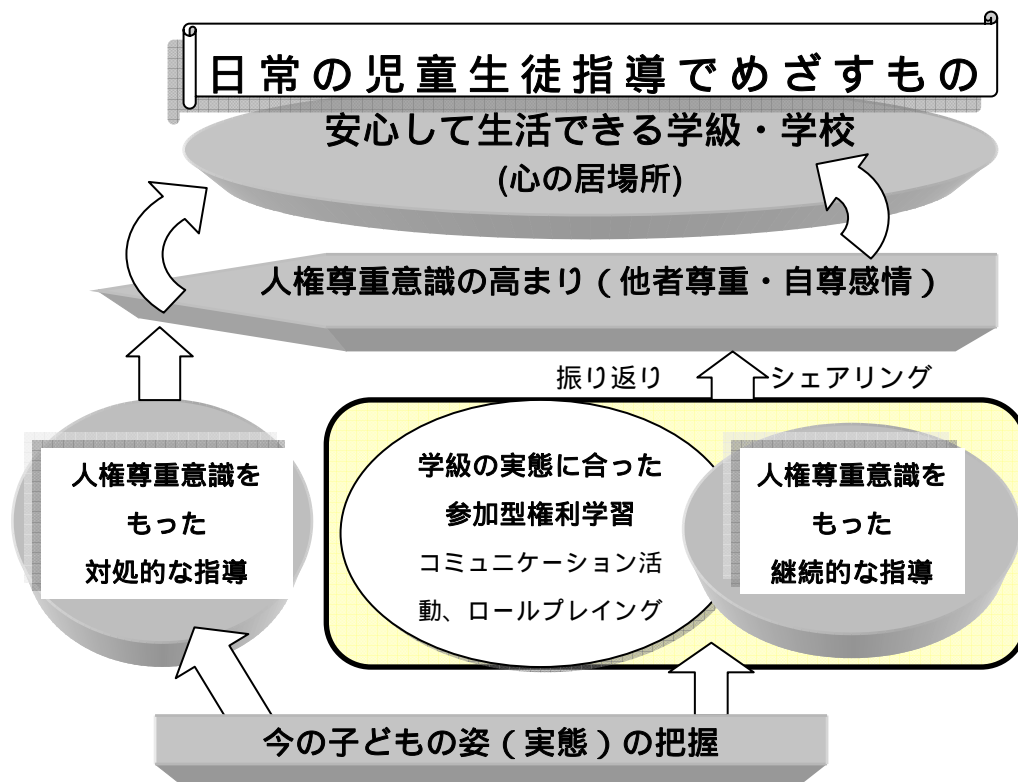


図 1 研究の構想図

以上のことから、本研究会議では、参加型権利学習を次のように定義する。

「一方的に知識を教え込むのではなく、自他の関係を重視した参加型の手法を取り入れ、子どもが学ぶ過程を大切にし、その学びの中から権利について自ら気付かせる学習」

具体的には、子ども同士の関係や、子どもと教職員との関係のように双方向な関係づくりを進めていくために、和やかな雰囲気の中で、身体を動かしながら色々な状況を体験したり、自分の気持ちをクラス全体に表現したり、相手の思いを受け止めるように聴いたりすることである。

## 4 研究の方法

### (1) 事前・事後調査の実施と分析(事前・事後調査から、子どもの実態を知る。)

各学級において、検証授業の前後に事前調査(平成16年5月下旬～6月上旬)と事後調査(平成16年12月上旬)を行い、回答結果を比較し、子どもの実態や権利意識の変容を分析する。

調査内容 外川正明<sup>3)</sup>が実施した「自尊感情についての考え方」、「人権侵害に対する態度・行動」についての調査項目を参考にして、本研究会議で作成した。

調査項目は選択式15項目、記述式4項目(これは小1では実施せず)で行った。

調査対象 ・A小学校1年生(34名) ・B小学校4年生(37名) ・C中学校2年生(35名)

注)小1の調査については、2択形式で行い、一部、設問の聞き方をわかりやすくした。

### (2) 検証授業の実施と分析(実施期間:平成16年9～12月 一部、年度末に実施)

A小学校1学年 学級活動 単元名「かんしゃ、はげまし、おうえんしよう!」(7時間構成)

B小学校4学年 学級活動 単元名「輝こう!一人一人が自分らしく」(7時間構成)

C中学校2学年 学級活動 単元名「よりよい明日に向かって」(4時間構成)

学級の実態に合うような単元構成の参加型権利学習を各学級で行い、毎時間、振り返りカードに記入してもらい、書かれた内容や授業中の発言やつぶやきなどの観察から、子どもの内面やその変容を見取る。また、単元構成した各時間の主となる「ねらい」をマトリックスで示す。マトリックスの「ねらい」の項目は、本研究会議で検討して決めた。その際、「子どもの権利条例」に照らして、条文に書かれた権利の内容と関連のあるものを取り上げるようにした。

### (3) 担任の日常の手立てによる子どもの変容の記録

各研修員が担任として、日常の教育活動の様々な場面の中で、常に人権尊重を意識して向き合ったり、かかわったり、指導したりすることにより、子どもがどのように変容するかを中心に具体的に記録する。(毎月の研究会議で日々の取組や学級での子どもの様子を報告し合い、データを蓄積する)

## 5 検証授業の実際と考察

### (1) A小学校1学年の実践

教科・単元名・・・ 学級活動:「かんしゃ、はげまし、おうえんしよう!」(7時間構成)

クラスの実態から意図的に「ねらい」とした、高めたい意識・させたい体験

友達同士がお互いのよさに関心を向け合えるような働きかけをしたい。

一つのことにみんなが気持ちを合わせて集中して取り組ませたい。

話を聞き合うことが、自分にも友達にも大事な勉強であるということを伝えたい。

がんばっている児童に焦点を当て、よさを褒めながら周りの子の意識も高めたい。

感謝・他者理解

協力

他者理解

自己受容・自己肯定感

<sup>3)</sup> 外川正明「人権教育の今後の展開に向けて」京都市立永松記念教育センター平成10年度研究紀要 1999年

単元指導計画

	学 習 内 容	主 な 学 習 活 動
第1時	「 <b>ありがとうを みつけよう!</b> 」 ・身近にある「ありがとう」に気付き、その気持ちを伝えようとする。	・心のノートを活用しながら、身近な「ありがとう」を発表し合う。 ・「サンキュータイム」を実施する。 帰りの会で、その日にあった「ありがとう」の体験を発表する。
第2時 【本時】	「 <b>みんな、がんばってるよ!</b> 」 ・がんばっている友達を、応援しようとする気持ちを高める。	・「リレー」「マット運び」などのゲームをしながら、元気よく友達に声援を送る体験をする。
第3時	「 <b>ともだちパワーをあげよう!</b> 」 ・困っているとき、失敗したとき、友達に励ましの気持ちを伝えようとする。	・友達が困ったり、失敗したりした場面で、どんな声掛けをしたらいいか考える。(ロールプレイング)
第4時 第5時 第6時	「 <b>ありがとう、ようむいんさん</b> 」 ・学校生活を支えてくれている学校職員さんの仕事に気付く。	・「はたらくひとびと(冊子・ビデオ)」を活用しながら、わたしたちのために働いてくれている学校職員さんの仕事について知り、感謝の気持ちを伝える。
第7時	「 <b>ぼくも、わたしもがんばるマン</b> 」 ・自分のよさに気付き、伸ばしていこうとする気持ちを高める。	・自分のがんばっている所を見つめる。 ・がんばりたい思いを、「がんばるマン人形」を作って表す。

表2 ねらいのマトリックス( = 各時間の主なねらい)

	仲間づくり	成就感 (成功体験)	他者理解 (共感する心)	感謝	協力	思いやり	信頼体験 (安心感)	自己理解	自己主張 (自己表現)	自己受容 (自己肯定感)	価値の共有
第1時											
第2時											
第3時											
第4~6時											
第7時											

本時の学習の展開(平成16年9月17日(金) 第2時「みんな、がんばってるよ!」)

学習活動	教師の支援
ゲーム1「折り返しリレー」をする。 ・2チームに分かれる。 ・次ゲームでどんな声援ができるか発表し合う。	・任意のグループに所属させるが、人数調整をする。 ・ゲーム後、声援を送っていた児童を十分に褒める。
ゲーム2「折り返しリレー」をする。	・どちらのチームの声援がいいか、参観者に審査員になってもらい、児童の意欲を誘う。
ゲーム3「おひっこし*」を行う。 *多くのマットを全員で協力して移動させるゲーム ・もし、応援する声が全然なかったら、どんな気持ちになるか考えさせる。	・今度はみんなで一斉に行うゲームなので、そのようなときには、どんな応援の仕方があるか、考えさせる。 ・ゲーム後、どんな声援が送れたか聞き、応援できたことを褒める。
ゲーム4「先生とおすもう」を行う。	・先生と試合をすることになった児童には、みんなの声援が欲しいか、どんな声援をしてほしいかを聞く。 ・先生のことまで応援してくれた児童に、大いに感謝の気持ちを伝える。
学習のまとめ 心のノートp.16「がんばってるね!」の挿絵を見て、がんばっている人を探す。	・運動以外でも、がんばっている人のことを、応援できる子は素敵であることを伝えたい。

児童の発言や振り返りから

第1時から始めた「サンキュータイム」での声からは、感謝の対象に広がりが見られた。

**クラスの友達に対して**

- ・体育で応援してくれた
- ・勉強を教えてくれた

**クラスの人々に対して**

- ・遊んでくれた
- ・質問を聞いてくれた

**掃除をしてくれた人に対して**

- ・トイレをいつもきれいにしてくれる人
- ・毎朝お掃除してくれる教頭先生

**担任の先生に対して**

- ・約束のCDを聴かせてくれた

**上級生に対して**

- ・飼育当番でいろいろと教えてくれた

	第4～6時の学習の振り返りから 「感謝の手紙」(いつも…してくれてありがとう)		その人たちのために 自分にできることは?
用務員さんへ	落ち葉をきれいにしてくれた	色々なものを、作ってくれた	・物を壊さないようにがんばります。
給食調理員さんへ	おいしい給食を作ってくれた	食べ終わった食器を洗ってくれた	・ご飯粒やスープの残りをちゃんととって片付けます。
栄養士さんへ	おいしい給食を選んでくれた	栄養を考えてくれた	・好き嫌いしません。 ・残さず食べます。
事務の方へ	学校で使う物を注文してくれた	跳び箱や机を買ってくれた	・物を大事にします。 ・勉強をがんばります。
養護の先生へ	病気のとき、寝かしてくれた	骨折したとき、手が痛いのを治してくれた	・けがをしないように気を付けます。
	けがの勉強を教えてくれた	けがをしたとき、病院へ連れて行ってくれた	

授業後に見られた、児童の変化の様子

- ・『サンキュータイム』の導入により、感謝の気持ちを素直に表現できる児童が増えてきた。  
1年生なりに周囲の人に関心を向けて、生活をしていることがよくわかった。
- ・意識して友達の声に耳を傾ける児童が増えてきた。まだ一部ではあるが、声が小さいともう一度意見を求めたり、意味がわかりにくいと質問をしたりできる児童が増えてきた。

考察(この権利学習の単元で参加型権利学習を実施してみた)

<評価できる点>

2学期に入り学校生活に慣れてきた子どもたちではあるが、お互いのことをよく知らず、関係も不安定である。もっと自分から友達に関心をもち、相手を知ろうとする姿勢が、仲間づくりの上で大切ではないかと考えた。そこで、「かんしゃ、はげまし、おうえんしよう!」を合言葉にし、子どもたちにそのような場面が見られたときには、積極的に認め褒めるようにした。

その結果、感謝の気持ちをもち、周囲に関心をもつ児童が増加したり、困っている友達を助けてあげたり、励ましてあげたり、「すごいな」という賞賛の意を表したりできる児童が増加したりするのが見られた。これが、学級全体の高まりに近づけられるよう、今後も継続して指導していきたい。

<改善が必要な点>

アンケート結果を見ると、友達同士のかかわりに関する項目では急激な変容は見られない。今回ねらってきた視点も一面で効果(自信や自己肯定感の高揚など)はあったが、人間関係でトラブルを抱えやすい児童が多い実態から考えると、今回のような視点は少し高度な内容だったかも知れない。それ以前に、子どもたち同士のかかわり方、社会性を身に付けるような活動をもっと取り入れた単元計画もできたのではないかと感じている。

## (2) B小学校4学年の実践

教科・単元名

学級活動：「輝こう！一人一人が自分らしく」(7時間構成)

クラスの実態から意図的に「ねらい」とした、高めたい意識・させたい体験

遊びを通してみんなで仲良く楽しみたいという気持ちを大切にしたい。 一人一人のセルフエスティームの高まりを期待したい。 人との違いを受け入れ、互いに認め合い、大切にしたい。	仲間づくり・協力・思いやり 自己受容・自己肯定感 自己理解・他者理解、価値の共有
---	--

### 単元指導計画

	学習内容	主な学習活動
第1時	ゲーム「この夏、1番の思い出は？」でコミュニケーション!	・一人一人の友達と夏の思い出を教え合うことにより、クラス全員とかがわり合い、安心して2学期をスタートさせる。
第2時	「大切な自分を守ろう」	・「CAPかわさき」による人権学習。意志の伝え方、身の守り方。
第3時	「よく見て気づこう!考えよう!」	・学校内の様子を表した絵を見ながら、「いやだな」「変だな」と思ったことを出し合う。
第4時	「自分ができること」	・縦割り班での遊びの様子を発表し合い、自分にできること、役立つことは何か、考え合う。
第5時(本時)	「俵作りにチャレンジ!」	・簡単なゲームや、「俵」(組体操の技)作りを通して友達とのかかわり方を振り返ったり、かかわることの楽しさを再確認する。
第6時	「人とちがっててもいいんだよ」	・人にはそれぞれ個性や違いがあることを理解し、互いの違いを尊重し合い、認め合って生活していこうとする。
第7時	「互いのよさを認め合って」	・1年間でわかった友達のよさを書き合う。 ・自分のよさを感じ、気持ちを発表し合う。

表3 ねらいのマトリックス( = 各時間の主なねらい)

	仲間づくり	成就感 (成功体験)	他者理解 (共感する心)	感謝	協力	思いやり	信頼体験 (安心感)	自己理解	自己主張 (自己表現)	自己受容 (自己肯定感)	価値の共有
第1時											
第2時											
第3時											
第4時											
第5時											
第6時											
第7時											

本時の学習の展開(平成16年10月12日(火) 第5時「俵作りにチャレンジ!」)

	学習活動	教師の支援
導入	<p>本時の活動について知る。</p> <p>グループごとに協力し合って、「俵作り」を楽しもう!</p> <p>・活動のめあて、活動の仕方についての説明を聞く。</p>	<p>・運動会で6年生が取り組んだ組体操の中の「俵」を作って楽しむことを知らせる。</p> <p>・どのグループも6~7人になるよう、必要に応じて、調整しておく。</p>
展開	<p>「アンパンマンじゃんけん」をして、この遊びの楽しさを振り返り「俵作り」に生かす。</p> <p>「俵」の練習をする。</p> <p>1班から順に「俵」を発表し合う。</p> <p>・発表前に代表者が「グループ自慢」をする。</p>	<p>・なごやかに楽しく活動するよさを俵の練習につなげたい。</p> <p>・笑顔で目と目を合わせて、互いのことを考え合いながら、活動できるように促す。</p> <p>・代表が、自分たちの練習の中で良かった点を報告することで、互いの班を理解し合う。</p>
終末	<p>学習のまとめをする。(教室に移動後)</p> <p>・友達と活動してうれしかったことや言葉、励ましをくれた人など「振り返りカード」に記入する。</p> <p>・カードに記入したことを基に感想を交流する。</p>	<p>・今日の活動と関連して、これまでの学校生活も振り返らせたい。</p> <p>・各自が今後のめあてをもてるようにする。</p>



本時における児童の行動や振り返りカードから見取れた、「ねらい」とのかかわり

**Aさん**：1学期に「背中渡り競走」をやったときには「渡り役」をやりがあって泣いたAさんだったが、今回グループの友達と俵作りの相談を始めたとき、自分の体格を考えてか、土台役をすぐに引き受けた **自己理解**。  
(振り返り)「さいごのきめポーズで、フジTVのやつをやって、楽しくて、みんながばくしょうしたのうれしかったです。あと、何人かの人『きれい』と言ったので、うれしいことばでした」 **自己受容**。

**Bさん**：(振り返り)「最初にアンパンマンじゃんけんをやって、顔合わせをして、みんなで協力できるようにしたかったです。私もがんばって、協力して楽しめたのでよかったです」 **仲間作り・協力**。

**Cさん**：(振り返り)「最初どうにもできなかつたけれど、ちゃんとみんなで話し合っただけで協力してできたかな、と思います。あんまりなかのいい友達じゃなくても、考えたり話し合ったりすることで、ちょっとだけなかのいい友達にもちかづけて、ふだんでも気楽にしゃべれる友だちになりそうです」 **仲間作り・協力**。

授業後に見られた、児童の変化の様子

第2時「大切な自分を守ろう」では、自分たちが生活していく上で、誰もが「安心して」「自信をもって」「自由に」生きる権利があることを学習した。その後クラスの中で問題が起こる度に、子どもたちは「安心・自信・自由」を合言葉のように口にするようになった。

第5時(本時)「俵作りにチャレンジ」の後、体育ではポートボールに取り組んだ。最初の時間で、ゲームの間に設けた作戦タイムの子どもたちの姿に驚かされた。担任が特別な投げかけをしたわけでもないのに、どのチームもコート隅にさっと集まると、円座になってすぐに話し合いが始まったのである。1学期の頃のように集まりが遅い児童や、集まっても違うことに気が向いているような児童は見当たらない。リーダーが指で地面に描いたコートに目を向けてフォーメーションを確認しているチーム、互いに顔を見合い身振り手振りで作戦を話し合っているチーム。どのチームも作戦タイムを真剣かつ楽しそうに過ごしているのだった。

第6時「人とちがってでもいいんだよ」の学習の最後に、一人の児童が「差別と区別ってどう違うんだろう」とつぶやいた。翌日、朝の会でこのことについて投げかけると、たくさんの意見が出され盛り上がり、その後も、ことあるごとに「それって差別じゃない?」とか、「これは差別じゃないよね、ただの区別だよ」という言葉が出るようになった。

考察(この権利学習の単元で参加型権利学習を実施してみた)

<評価できる点>

多くの児童がこの学習を楽しみにするようになった。翌日の予定に「学級活動」があると、「明日の学活、何?またこの間みたいな学活?」と尋ねる児童がいる。「何で、好きなの?」と聞くと「ゲームみたいなのが楽しいし、まじめに話し合いもできるから」と言う。4年生にとって、「権利」や「人権」は、言葉自体は抽象的でとらえにくいものだったと思うが、実は毎日の当たり前の生活の中で誰もが様々な形で出くわしている問題であることに気が付き始めたのではないだろうか。また、児童はそうした「権利」や「人権」にかかわる身近な問題について、今までも各々の中では大なり小なりの問題意識があった、ただそれを深く考えたり人と意見を交わしたりする機会に乏しかっただけだったのではないか。今回「参加型権利学習」という形態で単元を構成したことで、「今まで何となく気にかかっていた問題」や「誰かと話し合ってみたかった問題」が具体的な場面や事例、ゲーム的な活動を通して学習として成立していくことに児童は喜びや満足感を感じているように思えた。

また、授業として扱った内容が日常の中の様々な場面で思い起こされ生かされたり、次の授業の中で積み上げられたりといういわゆる「スパイラル(らせん)的」に高まっていくよさも、今回のようにある程度計画的に、意図的に授業として位置付けることで初めて生まれるものではないかと感じた。

<改善が必要な点>

単元の構成については、深い吟味が十分でないままにスタートしてしまった。より効果的な配列や活動内容が他にも考えられると思う。今回は学級活動としての扱いであったが、特別活動以外の教科等へも取り入れてはどうだろうか。ねらいが一致すれば、例えば総合的な学習の時間の中に、参加型権利学習を、単発ではなく、継続的に取り入れることで、一層の効果が期待できると考える。

(3) C 中学校 2 学年の実践

教科・単元名

学級活動：「よりよい明日に向かって」(4時間構成)

クラスの実態から意図的に「ねらい」とした、高めたい意識させたい体験

自分の考えを、自分の言葉で表現できるようになってほしい。

人の意見にしっかりと耳を傾け共感することで、よりよい人間関係を築いてほしい。

立場を置き換えて物事をとらえることで、相手の立場を考えられるようにさせたい。

自己理解・自己主張

他者理解・価値の共有

他者理解

単元指導計画

時	学 習 内 容	主 な 学 習 活 動
第1時	「自分探し」	<ul style="list-style-type: none"> <li>エゴグラムチェックリストに記入後、グラフを作成する。</li> <li>自分はどんな傾向があるか読み取る。グループで見せ合い、感想を聞く。</li> <li>将来こうありたいと思う自分になって、同じグラフを作成する。</li> <li>2つのグラフを対比して、どの自我状態を高めるのが望ましいかを考える。</li> </ul>
第2時	「考え方をチェンジ」	<ul style="list-style-type: none"> <li>各自ワークシートに悩みの出来事(事実)と感情を記入し、グループで発表する。</li> <li>他のメンバーは、出来事(事実)と感情の間にある考え方を当てる。</li> <li>どう考え方を変えられるか、違う考え方を話し合う。</li> </ul>
第3時	「考えを表現しよう」	<ul style="list-style-type: none"> <li>3人組で自己主張側・拒否側・観察者の役を交代ですべて経験する。</li> <li>ロールプレイングを通して、他の立場を理解する。</li> </ul>
第4時	「みんなでつくろう よりよいクラス」	<ul style="list-style-type: none"> <li>クラスの「好きだな」と思うことを各自シートに記入し、発表する。</li> <li>よりよいクラスになるための課題を3つにまとめる。</li> </ul>

表4 ねらいのマトリックス( = 各時間の主なねらい)

	仲間づくり	成就感 (成功体験)	他者理解 (共感する心)	感謝	協力	思いやり	信頼体験 (安心感)	自己理解	自己主張 (自己表現)	自己受容 (自己肯定感)	価値の共有
第1時											
第2時											
第3時											
第4時											

本時の学習の展開(平成16年11月29日(月) 第3時「考えを表現しよう」)

	学 習 活 動	教 師 の 支 援
導 入	アイスブレイキング「グループづくり」 指示に従ってグループをつくる。	<ul style="list-style-type: none"> <li>本時の内容を伝える。</li> <li>会話をしないで行うように伝える。</li> </ul>
展 開	3人組のグループに分かれる。 デモンストレーション	<ul style="list-style-type: none"> <li>グループを構成する。</li> <li>代表生徒と模範演技をする。</li> </ul>
	班ごとに役決め(自己主張側・拒否側・観察者) ロールプレイング 課題 (善悪の明確なもの) 課題2 (善悪が明確でないもの)	<ul style="list-style-type: none"> <li>役は全員が交代して行うことを伝える。</li> <li>拒否側は最後まで拒否し続けることを伝える。</li> <li>拒否側は拒否し続けるが、相手に共感できるなら最後に相手を受容して終わるように伝える。</li> </ul>
	班ごとに振り返りをする。	<ul style="list-style-type: none"> <li>やっけていて、気付いたこと、考えたこと、感じたことを話し合うように伝える。</li> </ul>
終 末	シェアリング ワークシートに感想を記入。	<ul style="list-style-type: none"> <li>話し合い後、何人が指名し、全体でシェアリング。</li> </ul>

## 本時における生徒の振り返りの感想から

<役立ち編>	人と話をするのは大切なんだということを知りました。 普段教えてくれないことを体験できるので、よい勉強ができました。 こういうのをやると、相手の気持ちがわかるし、今後の生活にも活用していけるし、とてもいい。 実際に日常であるようなことなので、ちゃんと断れるようにしようと思いました。
<苦勞編>	誘うことはあまりないのでかなり難しかったです。 拒否するのがこれほどまでに大変だとは思わなかったです。 話し合いのほとんどが答えられずに続かなくなりました。 課題1は自己主張側が悪いので、誘い言葉がうまく見付からなかったです。

### 授業後に見られた、生徒の変化の様子

- ・ 普段の生活の中で何の気なしに使われていた言葉や、友人との会話の中で少しずつではあるが相手のことを考えて話そうとする生徒が出てきた。
  - ・ 今まで、仲のよい友人相手に自分の考えと違っていても否定や意見することができなかった生徒に意識の変化が見られ、時折自分の考えを表現できるようになった。
- 考察（この権利学習の単元で参加型権利学習を実施してみて）

### <評価できる点>

- ・ 第1時にエゴグラムによる自己分析をしたため、自分の性格や考えに興味や関心をもち、自分を見つめ直すきっかけをつくることができた。
- ・ ロールプレイングを用いたことで、普段口数の少ない生徒や思ったことを口に出せない生徒には人と会話をするよいきっかけとなった。また、自己分析の後に行ったため、他者に対して強い意見や考えをもつ生徒が立場を入れ替えることで、意見や考えを言われる立場を経験することができ、自分が今まで行ってきた行動が相手にどのように伝わってきたのかを知ることができた。
- ・ 自分と他者とのかかわりや考え方の違いを知った上で、少数だが仲間との会話の中に相手を思いやった言葉が見られ、よりよい人間関係を築こうとする生徒が見られた。
- ・ 自己理解、他者理解、価値の共有という個から全体へのかかわりへと学習を発展させていったため、学習のつながりをしっかりとめさせることができた。
- ・ アンケートを見ると大きな変化は見られなかったが、振り返りの感想からは、日頃のコミュニケーション不足を感じさせるものも多く見られ、普段あまり考えることのない自分や周りの人のことを考えるよい契機となった。

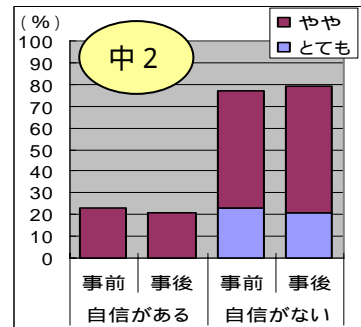
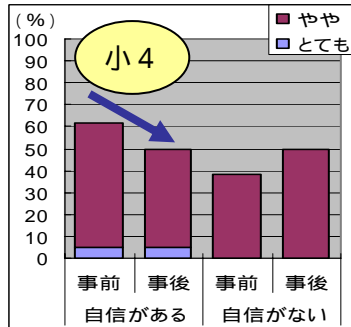
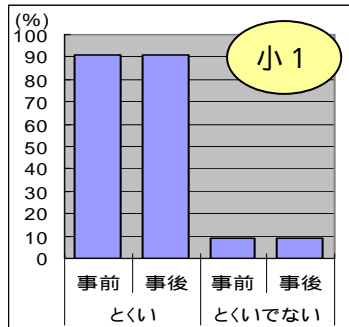
### <改善が必要な点>

- ・ 学習の流れとしてはよかったが、行事や学級の事情により、学習の間隔が空いてしまい、前時のことを忘れていた生徒もいたため、より計画的に学習を行う必要がある。
- ・ 中学生ぐらいになると本心を隠し教師側の理想とする発言をあえてする生徒もいるので、その見極めも必要だと感じた。

## 6 事前調査・事後調査の結果と分析

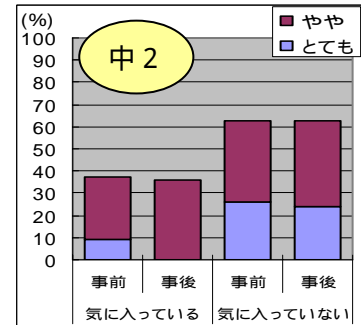
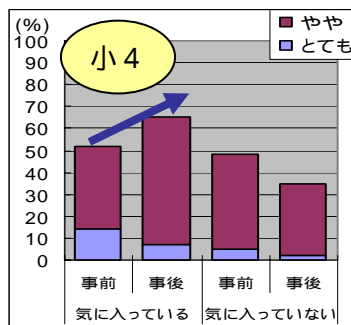
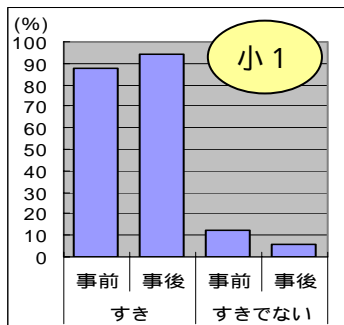
単元構成した権利学習の実施前に調査（事前調査）を行い、実施後にも同じ調査（事後調査）を行った。事前と事後の比較、学年による比較について分析して、集団としての子どもの変容を見取った。調査項目の中から、相対的に顕著と思われる結果が表れているものを取り上げ、考察を加えた。

### 問1 学校の勉強に自信がありますか。



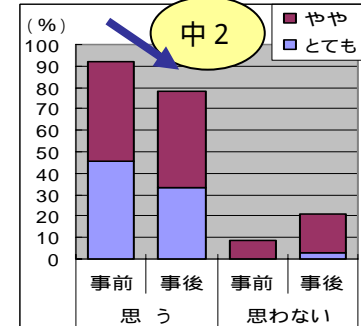
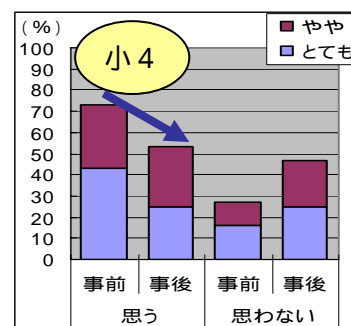
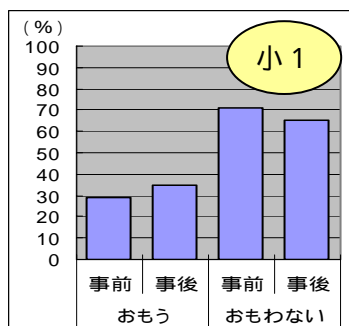
学年が上がるにつれて「自信がある」の割合が減少するのは、学習内容が難しくなることも原因の一つであるが、成長とともに自分を客観視できるようになるためとも考えられる。中学生では、かなり自信がある生徒でも、控えめに「やや」にしておくことも少なくないようである。

### 問3 自分の性格を気に入っていますか。



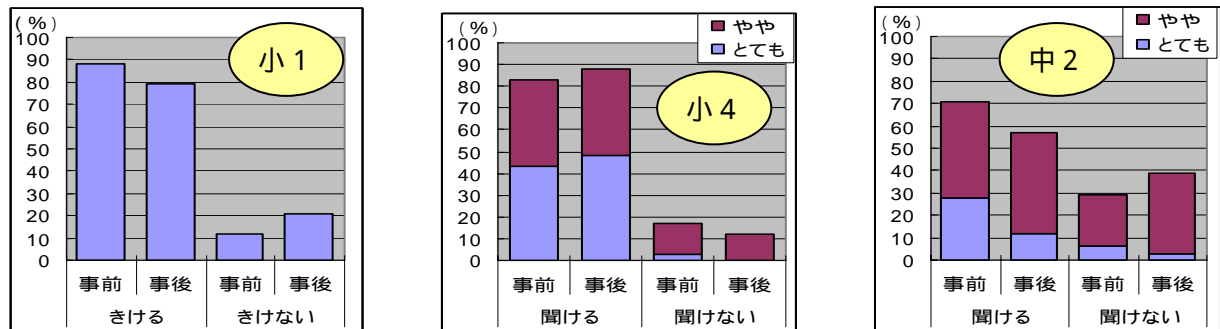
「気に入っている」の割合は、小1ではわずかな増加でしかないが、小4では1割以上増加している点が目立っている。権利学習などを通して、自分のよさが見えてきた児童がいたものと思われる。一般的に、小学校中学年頃が自尊心の高まる時期といわれている。この時期に参加型権利学習を行うことが、最も学習の効果が上がるのではないかと考える。また、中2では、「こうありたい自分」という理想のイメージが自分の中に形成されたことによって、今の自分の至らなさを感じているのではないかと見取れる。つまり、自己理解に基づく向上心の表れと見ることができる。

### 問13 いじめられるのには、その人にも責任があると思いますか。



小1にとっては、少し難しい内容であったと思われる。「その人にも責任がある」を「その人が悪いから」と説明してみたものの、そのとらえ方にはバラつきがあったように思われる。小4と中2では権利学習を進めていく中で、正しい見方ができてきており、人権尊重意識の高まりを感じさせる。

## 問 14 学級会で自分と反対意見が出てきたとき、素直に聞くことができますか。



小4で「反対意見を言われても聞ける」がやや増加している他は、小1、中2とも減少している。それぞれの発達段階における行動の特徴をよく表していると考えられる。小1は自我が形成されつつある時期で、2学期後半から話し合い活動ができるようになってきた。友達の見解に対して、ハンドサインを出しながら、少しずつ意見が言えるようになってきたという実態が多少影響しているものと思われる。小4は協調性が芽生えてくる時期で、人の話を素直に聞こうとする姿が見られる。中2は自己主張が徐々に強くなっていく時期で、ロールプレイングの成果もあり、相手の意見をうのみにするのではなく、少し考えて聞くようになってきたと思われる。

### 調査全体を通しての考察

「このクラスには、嫌なことを言われている友達がいますか」という質問で、小1では「いる」という回答が増えている。このことは、人権尊重に敏感な感性が育ってきたことで、今まで見過ごされてきた人権侵害に当たる事柄に子どもたちが気付くようになったからとも言える。

また、「仲間はずれにすることがあるか」の質問に対しては、小4、中2とも、「ない」という回答が増えている。子どもたちが、このような問題に対し、自覚できるようになったと見ることができる。

小1の児童にとっては、質問に使っている言葉自体の意味がはっきりと理解できず、抽象的に感じられる項目も幾つかあったようで、数字の結果だけでは読み取りにくい面も見られた。

また、行事の直後や、学級の調査当日のコンディションなどにより、何らかの影響があったことは想像できる。また、事前と事後を比較しての数字の変容は、すべてをこの間に行った権利学習によるものとは断定できず、一人一人の成長や、日常の様々なことが影響しての結果だと考えられる。

## 研究のまとめ

### 1 研究から見えてきたこと

川崎市総合教育センターの本年度の研究の柱は『自ら学ぶ』『共に学ぶ』『学び続ける』である。本研究では、この3つの柱に基づき、参加型権利学習の体験の中での気付きによって『自ら学ぶ』、権利学習後の振り返りで、お互いに感想を発表し合うことによって『共に学ぶ』、年間を通じて『学び続ける』と関連付けている。教師自身も、権利学習について『自ら学ぶ』、子どもと触れ合いながら人権尊重意識を『共に学ぶ』、子どもの変化に応じて『学び続ける』とすることができる。

半年間にわたる日常の手立てや検証授業を通して、仮説を検証するに当たっての3つの視点における子どもの変容を、担任の見取りから考察し、全体から見えてきたことを5点挙げてみた。

#### (1) 自尊感情の高まりが見られてきたか。

- 小1 : もともと意欲は高い1年生である。活動的なだけあって失敗も多いが、その意欲は日頃

から十分に認められているので、失敗を恐れているような児童はいない。むしろ、何度も失敗を重ねて日々小さな成長を重ねるタイプの児童が多い。そういう意味では、自尊感情の安定を感じさせる。

- **小4**：発達段階として、4年生という時期は、それまでの自己中心的な考え方や物事を感覚的にとらえる傾向から、集団の中の一員としての自分を見つめることができるようになったり、物事を論理的に考えたりできるようになる時期である。そうした時期の児童にとって、自分のよさを発揮できる場、友達同士がかかわり合い自分を表現しながら活動できる場の設定や、それを学習活動として扱うことの意義は大きいと感じた。
- **中2**：自分の性格や考えに興味や関心を持ち、自分を見つめ直すきっかけとなった。

## (2) 他者尊重の態度が身に付いてきたか。

- **小1**：感謝の気持ちを素直に表現できる児童が増えてきた。また、意識して友達の声に耳を傾ける児童が増えてきた。まだ一部ではあるが、声が小さいともう一度意見を求めたり、意味がわかりにくいと質問をしたりできる児童が増えてきた。相手に関心をもって接している姿が見られるようになってきた。グループ活動を行うと、以前はあちらこちらで意見の相違によるもめごとが頻繁に起こっていたが、最近は上手に活動ができるようになってきた。ルールを守ったり、譲り合ったりすることができるようになってきた。
- **小4**：「自分に自信がもてるようになり、自尊感情が高まること」が、他者尊重の態度にもつながるということを感じた。1学期のうち、「自分のことで精一杯」という感じだった児童が、徐々に友達への気配りができるようになったり、友達の考えも知りたいという姿勢を見せるようになってきたが、その背景には「自尊感情の高まり」があるのだと感じた。
- **中2**：全体では大きな変化は見られないが、一部の生徒に仲間を思いやる気持ちが見られ、例えば何か嫌なことがあった仲間に対し、まるで自分のことのように考え、少しでも人間関係がよい状態になるよう周りに働きかける姿が見られた。

## (3) 互いを大切にしよう学級集団がつくられてきたか。

- **小1**：日頃から、一生懸命がんばっている児童を認め、褒めている。そうすることで、周囲の児童も伸びようとする意欲が高まる。しかし、それでも気持ちが高まらない児童も中にはいる。友達に迷惑な言動をしてしまう児童に対しては、担任だけが注意をするのではなく、担任同様に迷惑な気持ちを抱えている児童にも、その気持ちを全体の場で伝えさせてきた。お互いに相手を選ぶことなく、誰とでも注意し合ったり、褒め合ったりできるような人間関係を築くことによって、自分の力の強さを誇示するような児童の姿が、大分減ってきた。「一生懸命がんばっている人を応援したい。」という気持ちを、日頃の学習(権利学習も含む)や生活の中で伝えていくことによって、児童の中にも互いに応援し合う気持ちが育ちつつある。
- **小4**：「互いを大切にしよう」ということは「互いを知る」ことから始まると考え、様々な場面で意見や考えを伝え合ったり、自己表現する場を設定したりしてきた。隣の友達と、または小グループで、あるいは学級全体で形態を変えながらの様々なかかわりを通して、互いの違いやよさを認め合っていくことができたのではないだろうか。こうした積み重ねの中で自尊感情や他者尊重の意識がスパイラル的にはぐくまれ、結果として互いを大切にしよう学級集団に近づけたのではない

かと感じている。

- **中2**：普段から相手の立場に立って物事を考えることや、人の前で自分の気持ちを表現し伝えることを中心に学級活動を行ってきた。そして、その一環として参加型の権利学習を適切なタイミングで（学級の実態に合わせて）取り入れることで、目立った変化は見られないものの、生徒の気持ちや感情へ何かしらの変化をもたらしているように見える。また、年齢的にも素直に気持ちを表現できなかつたり、相手のことを思いやっても周りを気にして表に出せなかつたりということも多いが、学習の中に他者とのコミュニケーションを中心に取入れたことで、自己表現をすることへの抵抗感が薄れると同時に、他者理解の気持ち生まれ始めている。

#### （４）全体から見えてきた大切なこと

学級経営の充実のために、権利学習を効果的に実施することの大切さ

日頃から何でも安心して語り合える学級、一人一人が自分らしく過ごせる学級でありたい。

小学1年生の場合、基本的な活動ができることの大切さ

友達と仲良く遊んだり、勉強したりするという基本的な生活力が権利学習を学ぶ上での基礎となる。1年生なりの思いや願いを引き出して、クラスの約束や学級目標の達成に向けた取組につなげていくとよい。

権利学習を行う上で一人一人に必ず自己表現の場を用意することの大切さ

自己表現の場が多くあることによって学習への参加意識が高まるのと同時に、自分の存在を肯定的に感じ、学級での自分の居場所を見付け、自信をもって過ごしていくことにつながる。

実態に合った参加型権利学習を工夫することの大切さ

権利を単に言葉としてではなく、体験を通して実感している様子が振り返りから見られた。また、適切なアイスブレイキングは、自分の考えを表現することへの抵抗を軽減させていた。

実践した教師自らが参加型権利学習のよさに気付くことの大切さ

周りの教師にもそのよさが伝わることにより、学年や学校全体での取組に発展していくことが望まれる。

まず、教師が気楽に権利学習を取り組んでみるのが、子どもたちにとって、入りやすい入口となる。子どもたちの「次の時間が楽しみだ」という感触がつかめたら、単元構成をした参加型権利学習を始めるとよい。教師が意識して権利を大切にできる場を設けることで、子どもたちも自分の権利を知り、自分を大切に思う気持ちや人とのかわりについて学ぶ経験を積み重ねることができる。これらの経験が、徐々に日常化し普段の生活の中で実践されるようになる。つまり、特別に意識しなくても他者の権利を大切にしたい行動がとれるようになると思う。

すぐには効果は表れてこないが、継続的に行うことで次第に効果が見られてくるだろう。

## 2 今後の課題

### （１）横断的に権利学習を実施する

中学校では、権利学習を行う時間の確保が難しく、単発になりがちである。現在行っている「川崎市子どもの権利の日（11/20）」の取組や権利学習に加えて、その周辺の時期に、権利学習としてのテーマに沿った内容を様々な教科と連携して、横断的に実施する方法も考えられる。

## (2) 発達段階に応じた展開例

どの学年でも毎年同じ展開例であると、高学年になるにつれて、マンネリ化してくる。それを防ぐために、発達段階に応じた権利学習を用意する必要がある。

## (3) 権利学習を児童生徒指導に生かすということは、学級経営につながる

教師が子どもの思いを大切に、一人の人間として子どもと向き合っていく人権尊重意識をもって日々手立てや対応を行うように心がけていく必要がある。子どものためだけでなく、教師自身のためでもある。

## (4) 権利についてただ教え込む形式の学習では、受け身の姿勢しか身に付かない

ねらいをはっきりとモチ、すべての教育活動を通して、総合的に指導することが望ましいと考える。今後、その点において、研究を進めていきたいと考える。

昨年、「人権教育のための国連10年」が最終年を迎えた。だが、川崎市の人権尊重教育を、これで終わりにしてよいわけではなく、今後とも、継続していくことが大切であることは言うまでもない。

最後に、研究を進めるに当たり適切なご助言を頂きました先生方、研究にご支援、ご助言をくださいました校長先生をはじめ学校教職員の皆様に、心より感謝し、厚く御礼申し上げます。

### 【参考文献】

森 実 『「教室の人権教育」何が実践課題か』 明治図書	1993年
喜多明人 『新世紀の子どもと学校』 エイデル研究所	1995年
國分康孝 『エンカウンターで学級が変わる・中学校編』 図書文化社	1996年
高久啓吾 『楽しみながら信頼関係を築くゲーム集』 学事出版	1998年
外川正明 『人権教育の今後の展開に向けて』 京都市立永松記念教育センター研究紀要	1999年
『小学校学習指導要領解説 特別活動編』 文部省	1999年
『中学校学習指導要領解説 特別活動編』 文部省	1999年
角田尚子 『人権教育ファシリテーター・ハンドブック 基本編』 ERIC 国際理解教育センター	2000年
源 勁一 『続・カウンセリングの目を生かす人権教育』 明治図書	2000年
神奈川県教育委員会 『人権・同和教育の実践のために 人権・同和教育実践事例集 第9集(小・中学校編)』	2003年
高田一宏 『わたし出会い発見 Part5 ~「小1プロブレム」を越えるために~』 大阪府人権教育研究協議会	2004年
法務省・文部科学省 『平成15年版 人権教育啓発白書』 国立印刷局	2004年
森田ゆり 『新・子どもの虐待』 岩波ブックレット No.625	2004年
吉澤克彦 『中学校学級づくり 構成的グループ・エンカウンター エクササイズ50選』 明治図書	2004年

### 【指導助言者】

横浜国立大学助教授	堀内かおる
川崎市立小学校児童指導研究会長(川崎市立片平小学校長)	多田 勝信
川崎市立小学校特別活動研究会長(川崎市立南百合丘小学校長)	高橋 学
川崎市教育委員会総務部人権・共生教育担当指導主事	田中真喜男
川崎市総合教育センター指導主事	江間 薫